

Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。



どこに向かうのかわからないまま、
ただ好きだから、やる

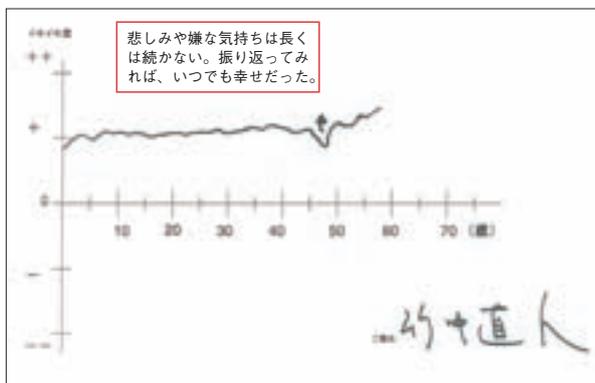
竹中直人氏 Takenaka Naoto

俳優、映画監督

Career
History

竹中直人氏の
キャリアヒストリー

1956年	0歳	神奈川県横浜市生まれ。一人っ子。絵を描くのが大好きで、少年時代は漫画家になりたかった。高校3年生のときに、結核で療養していた母が他界
1976年	20歳	東京芸術大学を二浪して、多摩美術大学に入学。映像演出研究会に入り、8ミリ映画の制作に没頭。テレビ番組『ギンザNOW!』の「素人コメディアン道場」で優勝する
1980年	24歳	劇団「青年座」に入団。大学卒業後もアルバイトをしながら劇団員を続ける
1983年	27歳	『ザ・テレビ演芸』出演をきっかけに芸能界に入る。翌年には映画『痴漢電車』で俳優デビュー
1990年	33歳	「青年座」退団。劇作家・岩松了氏と「竹中直人の会」を結成。2002年まで毎年公演を行う
1991年	34歳	映画『無能の人』で監督としてデビュー
1996年	39歳	NHK大河ドラマ『秀吉』で主演を務める。同年、映画『Shall we ダンス?』にも出演。個性的な演技が注目され、俳優として広く名を知られる
2011年	55歳	ミュージシャンとして14年ぶりにCDをリリース
2013年	56歳	7作目の監督作品『R-18文学賞 vol.1 自縄自縛の私』が公開される



直筆の人生グラフ。唯一の谷は、監督作の企画が複数頓挫した47歳のころ。「でも、お陰でお酒が飲めるようになりました（笑）」と竹中氏。

俳優、監督として数々の話題作にかかわり、日本の映画界で唯一無二の存在感を放つ竹中直人氏。学生時代から俳優志望だったが、芸能界デビューのきっかけは、27歳のときに出演したお笑い番組『ザ・テレビ演芸』。ブルース・リーや松田優作氏などのモノマネや「笑いながら怒る人」のネタが記憶に残っている人も多いだろう。

「お前の顔なんか映らなくていい」。
監督の言葉に傷ついたエキストラ時代

演じることが好きになった原点は、高校時代に級友の前で披露したモノマネだ。

「早生まれで常に取り残され感があって、1人で絵ばかり描いている子どもでした。友だちと仲良くしたいんだけど、何を話していいのかわからなくて。そのうちに、誰かの真似をすればしゃべれると気づいたんですね。自分ではないものになり切ることによって自由になれるのが楽しくて。先生の真似から始まり、好きな映画を何度も見てセリフを覚えては登場人物のモノマネをしていました」

美大時代には映像演出研究会に所属。8ミリ映画の制作に没頭し、出演するだけでなく脚本、演出も手がけた。「監督作は4本くらいかな。文化祭に向けて、みんな熱い気持ちで8ミリ映画を作るんですけど、上映したらコンペに出すこともなくおしまい。人に評価されたいという欲のある奴が誰もいなかったのが、何とも素敵でした。ただ好きで作る。その空気感が心地よかった」

映画の道に進むと強く心に決め、卒業後は劇団員になったが、最初は稽古場の掃除など雑用ばかりだった。

「ようやく映画のエキストラの仕事がきて、張り切って演じたら、監督が『カット、カット。お前の顔なんかいいらないんだよ』って。めちゃくちゃ落ち込みました」

「このままではダメだ」と学生時代に出演した素人モノマネ番組で知り合ったテレビ関係者を訪ね歩いて売り込みをしたところ、『ザ・テレビ演芸』出演が決定。同番組の新人芸人オーディションでチャンピオンになり、仕事が次々と舞い込むようになった。

監督たちの言葉に励まされ、
俳優としての個性を開花

芸人としてのブレイクを足がかりに念願の俳優デビューも果たしたが、当時は不安でたまらなかったという。

「どんな人でも一歩先はどうなるかわからない。人生は

不安がつきものだと思います。あのころはとにかく自信がなかった。人気が出て周囲の反応が急激に変わったことに戸惑い、『人からもてはやされるほど芸能界から消えるのも早いのでは』とビクビクしていました」

一方で周囲から期待されるのはうれしくて、期待に応えるために無理をして自分を作っていた面もあった。その必要はないと気づいたのは、デビュー2年目に出演した映画『ロケーション』がきっかけだ。

「お笑い出身なので、役者の仕事でも『面白いことをやってください』とよく言われていたんですね。だから、『ロケーション』の現場でも、初日の撮影のときギャグをかましたんです。すると、監督の森崎東さんが『カット。余計な芝居をするな。お前のままでやれ』と。感動で涙が出ました。僕を信頼してくれているんだって」

いざ素の自分で演じると、調子が狂ってNGカットも出したが、森崎監督は「オッケー。それでいいんだよ」と言ってくれた。

「五社英雄監督もよく『アニキさんのまんまで、ようござんすよ』と安心させてくれました」

監督たちの言葉に励まされ、自分をさらけ出して演じるうちに、いつしか「個性派俳優」と呼ばれるようになった。40歳のときには大河ドラマ『秀吉』で主演に抜擢され、周防正行監督によるヒット映画『Shall we ダンス?』でも脇役ながら味のある演技で話題を集めて俳優としての地位を不動のものにした。

「アクの強い役が多く、そのイメージが定着しましたが、静かな役もできるんですよ（笑）。監督に求められたからにはテンション高く演じますが、やりすぎじゃないかと不安になることもあります。『Shall we ダンス?』でもそうでしたが、周防監督は『竹中直人にやりすぎはない』と言ってくれました。そういう素敵な人たちとの出会いに、僕は突き動かされてきたんです」

俳優として30年。

いまだに切羽詰まっている

俳優として活躍する一方、34歳のときに『無能の人』で監督デビュー。その後、2013年2月公開の『R-18文

学賞 vol.1 自縄自縛の私』まで7作を手がけてきた。着実なキャリアだが、計画性はなかったという。

「『無能の人』にしても、監督になりたいというより自分で映画を作ってみたくて、プライベートでも映画の話ばかりしていたんです。すると、プロデューサーの奥山和由さんが『映画を撮って見ないか』と言ってくれた。ただ好きだから、やる。理屈は後からついてくる感じで」

監督作にも「テーマやメッセージはない」。「何かを伝えるなんていうのはおこがましいと思うし、物事を決めつけるのは苦手。出演者から演出、音楽、小道具まで、僕の『好き』を積み重ねた結果が1つの作品だと思っています。ただ、撮っていて面白いのは、世の中であまり機能していない人かな」

監督作の出演者たちには「先入観にとらわれないよう、脚本は読み込まなくていい」と伝えている。

「僕が演じるときも、撮影前に役を作り込みません。人間なんて理解できないまま生きていくもの。どこに向かっていくのかわからないまま演じていたいんです。仕事の依頼も脚本は読まずに受けるので、正直、後悔することも（笑）。でも、脚本段階で完成された『いい役』よりも、『つまらない役』を

もがきながらやるほうが、無様でもいい。『参ったな』と思いつつも、やるんです」

30年演じ続けてきたが、「余裕が出るどころか、常に切羽詰まっています」と照れ笑いする。

「新しい役をやるたびに、覚えることばかりですから。最近も剣豪を初めて演じましたが、立ち回りが難しかったのと、久しぶりの強い役が恥ずかしかった。演技中は無心なので平気ですが、我に返ると、いたたまれなくて（笑）。それに、演技をインターネット上で酷評されると、いまだに落ち込みます。だから、見ない。もっと器用になるものだと思っていました、大人になるってことは」



2013年2月2日（土）公開の、竹中直人氏監督最新作『R-18 文学賞 vol.1 自縄自縛の私』

「見ないこと」と「集中すること」 それが竹中流ストレス・マネジメント

大久保幸夫 ワークス研究所 所長

最新監督作品の『R-18文学賞 vol.1 自縛自縛の私』を見た。主人公以外は「社会的に機能しない人」で埋め尽くされている竹中監督らしい楽しい作品だった。主人公はそのような人々に囲まれながら、すべてを受け入れ、ストレスをため、そして自縛によって解消してゆくのである。

では、竹中氏自身はどのようにストレスをマネジメントしているのだろうか？ 役者として見るときの彼とは違い、素の竹中氏はとても繊細でシャイな人という印象だった。きっとストレスも敏感に感じる方なのでは？ と思ったのだ。

まずは巧みにストレスのもとになるようなものを「見ない」ということだった。インターネットなどに書き込まれている評価やコメントは「傷つくので一切見ない」し、その他の評価も見ないという。さらに驚いたことには、「自分とつい比較してしまうので」他の役者が演じる芝居もほとんど見ない。そして、自分が出演した映画やドラマも後から見ることはほとんどないというのだ。「芝居でやたらとテンションが高い自分を見たりすると恥ずかしくて」と竹中

氏は言う。思い出深いドラマとして彼自身が挙げている『Shall we ダンス？』や『のだめカンタービレ』での演技の話聞いても、演じ終わった後にはどうやら見ていないらしいということがわかる。

ストレスのもとになるものを見なくても、ストレスはたまる。それを発散する方法はきちんと仕事のなかに用意されていた。「芝居の役柄に集中すること」（竹中氏）だという。何かに集中しているとき、人は余計なことを考えなくなる。一定期間集中している時間があると、それ以前に気になっていたことはずいぶん薄れることになる。なるほど！ これほど素敵で建設的なストレス解消法はない。

「見ないこと」と「集中すること」。このINとOUTの構造ができているからこそ、繊細な感受性を持ちながらも、長きにわたって、多くの作品を生み出し続けていられるのだろう。

最後に、47歳で覚えた酒（仲間と楽しむ酒）もストレス解消法の1つだと付け加えてくれた。こちらはストレス解消の王道だが、度が過ぎると健康を害するのでくれぐれも注意を。

竹中直人氏のストレス・マネジメント

